

第17冊・第39回（下）

『仏教抹殺』

～なぜ明治維新は寺院を破壊したのか～
鵜飼秀徳、文春新書

京都奈良を変えた上知令

前号では、薩摩・長州での廃仏毀釈、そして古都奈良や京都での廃仏毀釈の様子を見てきました。

今回は、京都や奈良の町を大きく変えた「上知令」について見ていきます。鹿がたむろする奈良公園はいかにしてできたのか？京都の新京極や祇園界隈の町並みは江戸時代とは全く異なります。なぜ、そうなったのか？それらを見ていきます。

寺社領の上知を強硬

日本史を学んだ人なら「上知（あげち）令」を知っていますよね。最も有名なのは、江戸時代の**天保の改革**の際の「上知令」です。

老中水野忠邦が、幕府のひっ迫している財政状況を改善するために江戸や大坂近郊の大名や旗本の領地を取り上げようとした政策でした。

なぜ、江戸や大坂近郊かというと、江戸・大坂近郊は、幕府領（天領）、大名領、旗本領が入り組んでいたからです。そこで、大名、旗本には十里四方に該当する領地を幕府に返上させるかわりに、大名・旗本の本領の付近で替え地を幕府から支給するという命令を出します。

上知の最大の目的は、窮迫する幕府財政の補強です。ほかにも、上知した土地を海防の基地にする目的もありました。

当然のことながら、江戸・大坂十里四方に領地を持つ大名旗本から反対が起こります。領地替えは莫大な経費を必要としますし、当時の大名・旗本の多くは領民から借金をしており、領地替えで借金が踏み倒されるのではないかと領民の危惧もありました。

多くの大名・旗本、特に貨幣経済が発達している江戸・大坂近辺においては、財政上の理由で藩札・旗本札を発行しており、これは実質的に領民から借金をしたのと同じです。大名・旗本が国替えになると、従来の藩札・旗本札は当然、無価値になるため、その前に正貨との交換をしなければなりません。大名・旗本の側に交換する余裕がなく、額面からかなり差し引いた金額での交換を余儀なくされる事が懸念されたのです。

その点、「忠臣蔵」でおなじみの赤穂藩では、「お家断絶」になる前に発行した藩札＝借金を返そうと、大石内蔵助らが奮闘するシーンが出てきます。そして、借金を返したので、大石らの評価が高いんですね。

「上知令」は、領地を召し上げられる大名・旗本から反発され、結果的に水野忠邦が失脚することになってしまいました。つまり、「上知令」は失敗したわけです。土地を取り上げられる者が、それなりに力を有する大名や旗本ということは、反対勢力がそれなりに力を持つ人々でした。ですから、「上知」はできなかったのです。

しかし、明治の「上知令」は政府＝権力を有する者が権力を有しない、廃仏毀釈の対象となっている「弱小勢力」を相手に行おうとするものですから、反対しても政府への抵抗勢力にはならなかったのです。寺院側の味方をする者はほとんどいなかったのです、残念ながら。

『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』で見てください。

榎村府政による宗教弾圧の中でも、**仏教界にとって最大の激震となったのは、やはり寺社領上知（地）すなわち土地の召し上げであった。**

1867（慶応3）年、大政奉還で天領（幕府直轄領）の大部分が、続いて1869（明治2）年の版籍奉還によって、藩が所有していた土地（版）と人民（籍）が、新政府に奉還されていた。

だが、寺社領は版籍奉還によっても手が付けられず、広大な敷地を残したままであった。江戸時代まで寺社は将軍（幕府）が発行する朱印状によって安堵された朱印地、並びに大名（藩）による黒印状によって安堵された黒印地の両方を有していた。朱印地・黒印地では租税が免除されていた。そこに1871（明治4）年と1875（明治8）年の二度にわたって、寺社に対して、上知令が布告されたのである。

第1次上知令によって、境内を除くすべての領地と除地（免租地）が国に取り上げられた。また、第2次上知令では境内地も対象となり、境内の主たる領域を除いて全て召し上げられた。

京都市が編集した『**京都の歴史 7**』などの資料によれば、著名な寺院領の減少は以下の通りである。

として、数字が列挙されています。それを見やすいように次のページに表にまとめました。

これによると、上知前と後では、寺社領が数分の一にまで減少していることがわかる。清水寺に至っては1/10以下にまで境内地を減らした。二度にわたる上知令によって、市内の寺院は経済的にも計り知れない打撃を受けたのである。

『京都の歴史』では、「この2回の上知令によって大きな打撃を受けたのは、神社よりは寺院であり、中でも黒印地や除地を多く持っていた天台・真言・臨済・時宗・浄土の寺院でその傾向は著しく、また概して土地への依存度が低かった日蓮・曹洞・真宗の寺院の打撃は、前者に比べると少なかった」と述べられている。

寺院名	上知前	上知後	カット率
高台寺	9万5047坪	1万5515坪	約84%
因幡薬師堂	2743坪	1787坪	約35%
清水寺	15万6463坪	1万3887坪	約91%
東本願寺	4万6614坪	1万8600坪	約60%
相国寺	7万坪	2万7000坪	約61%
大徳寺	6万9000坪	2万4000坪	約65%
鞍馬寺	35万7000坪	2万4000坪	約93%
鹿苑寺金閣	72万坪	27万坪	約62%
知恩院	6万坪	4万4000坪	約27%
建仁寺	5万4000坪	2万4000坪	約56%

奈良の場合はどうでしょうか？

興福寺は現在、境内面積2万5000坪を有する巨大寺院である。しかし、宝暦年間（1751年から1764年）に描かれた「春日興福寺境内図」を見れば、その境内規模は現在の数倍はあったと推定できる。現在の奈良国立博物館、奈良県庁、奈良地方裁判所、奈良ホテルは、みな、もとの興福寺の寺領に建てられているのだ。

上知で新京極通ができた

では、京都府は上知した寺院の領地を何に使ったのでしょうか？京都のためになったのでしょうか？

『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』で見てください。

神仏分離政策、そして上知令により、膨大な寺社領が召し上げられたことで、京都はその景観を一変させていく。

その一例が、**新京極通の誕生**である。

新京極通は、京都における「原宿・竹下通り」とも言われるファッションストリートだ。三条通から四条通までの約500mを貫くアーケード街になっていて、京都在住の若者だけでなく、修学旅行の学生や、最近では多くの海外旅行者がこの道を闊歩する。京都では、最もにぎにぎしい場所の一つである。

しかし、江戸時代まで、この通りは存在しなかった。そこには多数の寺院が南北に連なるように立っていたからである。つまり、浄土宗西山深草派総本山である誓願寺を北限（三条側）にして、その南方（四条側）に向けて、誠心院、西光寺、永福寺（蛸薬師）、安養寺、増長寺、了連寺、歓喜光寺（錦天満宮）、金蓮寺などが連続して建っていた。

これらの寺院は、豊臣秀吉の京都大改造の一環で、京都の東の端、東京極大路沿いに集められた約80カ寺の一角を占めるのだった。秀吉は外敵から京都の街を守る目的で、寺院を兵站の拠点にしたのだ。

私も若いころ、新京極通をよく歩きました。確かに「ファッション街」という感じでしたし、修学旅行生が京都のお土産を買う街、そして何よりも映画を見に行く街でした。現在はコンプレックスの映画館があちこちでできていて、新京極の映画館はほとんどなくなってしまいました。コロナ前には中国や韓国の観光客であふれかえっていましたね。

この辺りには、よく見ると寺院が残っています。豊臣秀吉が京都を「お土居」で囲んだ時に、寺院を集中させました。それが現在の「寺町通」界限になります。今出川通の北あたりにも寺院がたくさん残っています。



現在の誓願寺



本山本満寺

ところが、明治に入り、先述の京都近代化政策と、にわかに布告された上知令とが重なり合い、寺院が整理されることになった。

そのうちいくつかの伽藍を備える巨大な寺院であった誓願寺は、飛鳥時代、天智天皇の

誓願によって奈良で創建。鎌倉時代初期、一条小川町に移転した。中世は女人往生の寺として名を馳せ、清少納言や和泉式部がここで往生したと伝えられている。和泉式部の庵は、現在、隣接する真言宗泉涌寺派誠心院になっている。

さらに誓願寺はその後、秀吉の政策によって現在の地に移された。この時の境内地は現在の三条通から六条通に及んだという。

しかし、維新時、誓願寺は時代に翻弄されることになる。1864年（元治元）元年の禁門の変で、伽藍と本尊を焼失。その復興過程で神仏分離令が出された。

現在、誓願寺を訪れると、その本堂に座高2.4mの大きな阿弥陀如来像が鎮座し、多くの参拝客を驚かせる。大きな光背には干体仏が刻まれ、実に神々しい姿を見せている。この大仏は、もとは石清水八幡宮の八幡神の本地仏として安楽寺に安置されていたものだ。ところが、おりしも廃仏毀釈の嵐が京都に吹き荒れ、当時、焼失して本尊不在であった誓願寺に移されることになったのだ。1869（明治2）年のことであった。

誓願寺が大仏を本尊に迎え、復興を遂げようとしていた矢先に、上知令が布告される。6500坪あった境内地のうち4800坪が取り上げられたことで、誓願寺は経営難に陥り、塔頭寺院18院のうち15院が廃寺になってしまった。・・・

第1次上知令の翌年、1872年（明治5）冬には、上げ地された土地は民間の手に渡って道路敷設工事がなされた。それが現在の新京極通なのである。

誓願寺の塔頭竹林院の跡地はその後、松竹の手に渡り、常盤座が建てられた。新京極は戦後、高度成長期からバブル期にかけて、劇場・映画館がずらりと軒を並べる日本を代表する興行街として繁栄していく。

現在、京都の繁華街を南北に通っている河原町通もご存じのように元々「河原」でした。河原が道路になったのですね。そんな場所は、例えば宇治にあります。宇治駅から山城自然運動公園に伸びている道路（消防署や市役所が並んでいます）も昔は川だったそうです。

近世の京都でたくさんの寺院が並んでいた所に、上知した場所に新京極通が造られたのでした。

実は、京都の寺院整理に伴う再開発の例としては、祇園もあげられます。今の祇園を歩いてみると、**花見小路**界隈は祇園巡りの観光名所になっています。私が大学生の頃と比べると、ほんとにきれいに区画整理されています。外国人観光客が闊歩しやすいようになっています。

ここには何があったのでしょうか？どこの寺から取り上げたのでしょうか？

それは、元々**建仁寺**の寺領でしたが、その北側の部分は上知によって京都府の所有になります。その土地を、祇園のお茶屋組合が譲り受け、花見小路などに整理していきました。

京都を代表するような繁華街や観光名所は、江戸時代にはなかったのです。明治初期の廃仏毀釈によって誕生していたんですね。あなたは知ってましたか？

廃仏毀釈で誕生した島津製作所

京都といえば、お寺や神社の多い町、平安時代から江戸時代まで都のあった町、江戸時代の三都と言えば江戸・大坂・京都でした。

京都は江戸時代、「工芸の町」としても有名でした。西陣織のような伝統産業もありました。

「京都の産業」といえば、何をイメージしますか？

現在、京都に本社のある大企業もいくつかあります。思い出す企業はありますか？

そうですね、京都には**京セラ、日本電産、村田製作所、任天堂、オムロン、ローム**など名だたる大企業が存在しますね。

この中で創業が最も古いのが任天堂です。任天堂は1889（明治22）年創業で、元々は花札を製造していました。私が子供のころはトランプも作ってましたね。のちに、「スーパーマリオ」が世界を席卷し、今も「あつまれ どうぶつの森」など面白いゲームソフトを作る会社になっています。日本電産などその他の企業は、戦後の創設がほとんどで歴史は新しいです。

さて、任天堂の操業よりも14年古いのが**1875（明治8）年創業の島津製作所**です。

島津製作所といえば、**2002（平成14）年にノーベル化学賞を受賞された社員の方がいましたね。名前を覚えていませんか？**

名前は**田中耕一氏**でしたよ。

で、島津製作所といえば、精密機器の総合メーカーです。実は今日の島津製作所があるのは、廃仏毀釈が少なからず関係しているらしいのです。

そのあたりのことを『**仏教抹殺 なぜ明治維新は寺院を破壊したのか**』で見てくださいよう。

たどれば島津家**17代当主島津義弘**が、豊臣秀吉から京都に呼び出された際、**井上惣兵衛**という武士が懇ろに世話をしたという。その惣兵衛の態度に感動した義弘が、300石のお墨付き刀槍、そして「島津」の家名と「丸に十」の家紋を贈ったのが、島津製作所の源流である。

島津製作所を創業したのは**島津源蔵（以下、初代源蔵）**という人物だった。初代源蔵は現在の堀川六条で、具足の製造を専門にする仏具店に生まれた。仏具業界における具足とは、主に寺院の本堂内陣に置かれる香炉、花生け、燭台、高坏、仏飯器など鑄物でできた仏具のことである。初代源蔵は父清兵衛の下で鑄物具足師としての修行を積み、1860（万延元）年21歳で分家、独立。木屋町二条に居を構えた。

初代源蔵が独立した年には、不平等条約である**日米修好通商条約**が調印され、開国を推し進めた大老**井伊直弼**が桜田門外の変で暗殺されるなどの不穏な事件が起きている。この時点ではまだ、京都における仏具店は御所や多数の寺社を取引先に抱え、安定して需要を得ていたと考えられる。

ところが、それから8年が経過した**1868（慶応4）年**。いよいよ**神仏分離令**が布告さ

れると、状況は一変する。先に述べたように、京都府は多数の寺社から金属を供出させる政策に出たのである。金属を型に流し込んで仏具を製造する初代源蔵たちは危機的状況に追い込まれた。

一方で、文明開化ののろしが上げられ、1870（明治3）年に化学技術の指導を目的とした舎密局、翌年に殖産興業を推進する本部である勸業場などが設立されると、勸業博覧会の開催、新京極通の敷設などが次々と具現化していく。

仏具業界の先行きを案じつつも、初代源蔵は今こそ産業構造の転換期にある、と鋭く察知した。彼は舎密局に出入りを始めると、持ち前の探究心を発揮し、理化学の知識と技術を瞬く間に習得していったのである。鋳物で培われた技術を活かして、輸入された教育用機器の修理や整備などを手がけた初代源蔵は舎密局から理化学機器の製造の受注を請け負うようになっていく。舎密局で指導に当たっていたドイツ人科学者ゴットフリート・ワグネルとの出会いもあり、初代源蔵は斜陽産業となった仏具製造から国策の中樞を担う理化学機器メーカーの立ち上げへと華麗なる事業転換を遂げていくのである。

島津製作所の初代源蔵さんはすごいやり手ですね。時代の流れをキッチリとつかんでいます。彼が人並み秀でた人物であることは確かですが、それだけではないんです。

彼の当時住んでいた場所は高瀬川の舟入りを挟んだ勸業場の北隣だったそうです。また、舎密局（せいみきょく。明治維新期における化学・技術の研究・教育、および勸業のための官営の機関）や榎村知事邸も目と鼻の先にあり、時代の情勢をいち早く入手できる環境にあったと言えます。

初代源蔵は京都府第2代知事榎村に特に重用されますが、理化学機器製造の一方で、家業である仏具製作を続けることも忘れなかったと言います。

初代源蔵が始めた理化学機器製造にとって追い風となったのが、日本で最初に実施された新しい教育政策でした。先に触れましたが、京都では1869（明治2）年に計64校の小学校が一斉に開校しました。明治政府の「学制」よりも3年先んじているのでした。

なぜスピーディーに学校を新設できたのでしょうか？不思議に思いませんか？

それは廃仏毀釈によって多くの寺院が廃寺になった結果、その土地が活用され、またお寺の伽藍が小学校の校舎として転用されたからなんです。

神仏分離政策の1つ、「上知令」によって寺院の領地は激減しますが、京都において寺の領地の一部が「小学校」の敷地となり、京都の子供たちの教育が行われていったということはプラス面と言っていいのでしょうか。

新政府による正式な学制の太政官布告は1872（明治5）年8月のこと。例えば筆者の出身校でもある京都市立嵯峨小学校は同年8月に開校している。嵯峨小学校はもとは、天龍寺塔頭の招慶院の敷地と伽藍を使って創立された。招慶院は、もとは靈松院といい、1401（応永8）年に夢想国師の高弟絶海中津が創建した由緒ある寺院だった。しかし、1868（明治元）年に神仏分離政策に伴う塔頭寺院の統廃合によって、兵庫県神戸市への移転を余儀なくされた。その跡地が嵯峨小学校になったのである。校章には、近隣の大覚寺の寺章が採用された。現在の校舎の一部には招慶院の唐破風が使われ往時の姿を偲ばせている。

学校が生まれれば、さまざまな実験計測器が必要になる。初代源蔵は鋳物製造で培った技術を理化学機器の開発に転用させていく。京都府中学初代校長を務めた教育者今立吐醉（いまだてとすい）は1920（大正9）年12月発行の『京都一中会誌』の中でこう述べている。

「中学校の教授器械の不足を補うために大変力になってくれた島津源蔵という人の功績はここに記載しておきたいと思います。物理化学の器械で東京でもできないもの、またたとえできても大変費用のかかるものは彼に教科書中の図を見せて説明を与えてやると間に合うように拵えて呉れました」

それでもまだ日本が貧しい時代、初代源蔵が事業を始めた当初は、必ずしも思うような受注が得られたわけではなかった。しかし、1877（明治10）年に東京上野で開催された第1回内国勲業博覧会において、初代源蔵は医療用ブージー（拡張器、ソノデ、細管）を出展。それが褒章を受けたことがきっかけで、事業は軌道に乗って行く。

その後のことですが、初代源蔵から長男の2代目源蔵へと代替わりした頃には、仏具業から完全に撤退します。そして、**2代目源三さんは蓄電池の研究と事業化に奔走**していきましました。

そして蓄電池事業は時代の趨勢をとらえます。1904（明治37）年に始まった**日露戦争によって特需**となったんです。この蓄電池は島津源蔵の頭文字を取って「**GS蓄電池**」と命名されました。

あなたは「GS蓄電池」から、何かイメージするものはないですか？

そう、**自動車用バッテリーのシェアが世界第3位で知られるGSユアサ。その源流が「GS蓄電池」**なんです。

明治維新の光と影があって、今日の島津製作所があります。それが歴史のめぐりあわせ、というものなんですね。

今回もお読みいただき、ありがとうございます。